したが、まさに00年代後半以降、インターネットやスマホの普及にともなって、クラシックにも、以前では考えられなかった発想とコンセプト、コラボレーションを現実化する音楽家たちの姿を見かけるようになった。「ネオ・クラシック」とでも名付けたいこの潮流をこれから紹介していこうと思う。

DJがクラブでプレイするテクノやハウスといったエレクトロミュージックとクラシック音楽。前者が若者が踊りまくり、ナンパなんぞもある娯楽施設の音楽ならば、後者はジャケット着用で咳をするのもはばかられるような行儀第一の場所で聴かれる音楽だ。一般的に両者は水と油のごとくに思われている。

しかし、実のところ両者の音楽は非常に似ている。クラシックの交響曲を聴き込んだ耳ならば、一流DJのクラブプレイの中に、管弦楽の組み合わせのような音色同士の組み合わせや、あるときにはクラシック音楽理論の対位法（個々のパートが対等で、それぞれが独立性を持った旋律を奏でる）と同様の音作りを発見することができるだろう。DJには一人が何時間も音を続けてプレイするロングセットというスタイルがあるが、これなんぞはマーラーやブルックナーなどの長尺の交響曲を彷彿。寝言で耐えた後のめくるめく爆発、大きな建築物の内部を様々な意匠や景色を探訪しながら登っていくような構造体験、音が流れる時間そのものを異能するタイム感覚などは、両者に共通の「音楽の醍醐味」なのだ。

非常に美しく融和的

00年中盤、ひとつの画期的な動きが始まっていた。それは、交響楽団がDJに楽曲制作を依頼する、といういまだかつてないスタイル。実はこの動きの発端に、私は立ち会っている。04年のバルセロナ、ソナーという国際的な音楽フェスでの企画公演がまさにそれで、バルセロナ交響楽団&カタルーニャ管弦楽団に、坂本龍一をはじめとして、バン・ソニック、フェネスといったエレクトロニックアーティストたちが、ラップトップコンピューターで共演したのである。ちなみに、ドボルザークの「新世界」のオケ演奏に坂本龍一が絡ませたのは、イスラム世界のコーランのサンプリング音。新世界とはアメリカ大陸のことなので、このアイデアは批評的な意味合いを帯びるが、実際の音楽のほうは非常に美しく、融和的だったことをはっきり覚えている。

その動きとシンクロするように、フランスのモンペリエ国立管弦楽団が、世界的なテクノDJで、クラブミュージック界では神格化されているジェフ・ミルズに楽曲制作と共演を依頼し、初演したのが05年。神業的なミックス手法や「ジェフ音響」とも言える世界観を打ち出し、数々の名アルバムをリリースし続けている才能に目をつけたのは、クラシックにおけるオーケストラサウンドに、まだ見ぬ可能性を見いだそう、という想いだったのではないだろうか。

向井山朋子。オランダ・アムステルダム在住のピアニスト、アーティスト。音楽だけでなく美術、建築など幅広い分野とコラボレーションする

気軽にクラシックを！

ジェフのヒット作である「ザ・ベルズ」や「アマゾン」といった作品をシンプルに編曲し、共演することから始まったコラボは、1回だけではなくその後も継続。楽曲も組曲化したテーマ性を持つものに熟成していった。最新作「プラネッツ」では、彼がテクノ分野でも好んで取り上げていた宇宙というモチーフを60分以上の交響組曲に仕上げている。長年、クラブミュージックの現場で培ってきた、クラシック音楽とは全く異なるイディオム（表現法、スタイル）が、見事にオーケストラの音に置換されており、たんなる「異種格闘技」とは違う、ひとつの到達点がこの楽曲には存在している。

思えば、クラシックは、ガーシュインの手になるジャズの響き、バルトークによるユーラシア大陸の民族音楽のセンスなど、多ジャンルの影響を取り込みつつ、表現の幅を広げてきた。この動きは、デリック・メイなどのデトロイト・テクノの盟友たちにも広がっている。若い世代では、クラシックのピアノソリストとしてのキャリアと同時に、テクノアーティストとしての活動も行っている、フランチェスコ・トリスターノ・シュリメのような才能も世に出ており、クラブミュージックとクラシックのカップリングは、「ネオ・クラシック」の一翼たる新しい響きを広げているのだ。

クラシックのライブ体験は、生音の響きを優先した専門ホールで、というのが常道。そこでは皆が演奏者の音に集中するために、曲中の雑音は御法度。一度、演奏が始まったら、途中入場も許されない厳格さがある。

ジェフ・ミルズ。1963年、デトロイト生まれ。「ジェフ音響」とも言える世界観を打ち出した。写真はロンドンのバービカン・センターでの演奏

photo Mark Allan（34ページ）／川島崇志（左）